

〈研究ノート〉

発話文の発音に対する日本人教師とロシア人教師の評価の相違

一文に対する評価と語に対する評価の比較から

渡辺 裕美

要 旨

本研究ではロシア人学習者の発話文を対象とした場合に、日本人教師（以下JT）とロシア人教師（以下RT）の発音評価に差が見られるかどうかを検証した。その結果、JTは「拍の減少」と「アクセント」に注目しやすいことが示唆された。また、JTはRTより意味に影響する誤りや、音素の変化、高低の誤りに注目することが示された。一方、RTは「ロシア語の単音」「ストレスアクセント」「ポーズ」に注目する可能性が示唆された。また、RTはJTより「ロシア語の単音」や、ロシア語の特徴が表れている「イントネーション」に注目することが示された。ただし、全体的に発音特徴の指摘には個人差が大きいことがうかがえた。

なお、語に対する評価と比較した場合、RTは文評価では「す→ず」「拍の減少」「曖昧母音化」に注目しないことが示された。また、教師自身が認識していない発音特徴の場合、語評価では指摘できるものの文評価では見逃す可能性があることが示唆された。

【キーワード】

発音評価 母語話者教師 非母語話者教師 ロシア語母語話者 音声教育

1. はじめに

第二言語教育において、学習者の誤用をめぐる研究は、第二言語習得研究や教授法の変遷とともに発展してきた。そうしたなか、70年代後半に、第二言語教育においてコミュニケーションが重視され始めたのと時期を同じくして、学習者の言語運用に対する母語話者評価を取り入れようとする研究が注目されるようになった。日本語教育においても、80年代後半以降、評価研究が盛んに行われるようになった。特に発音に焦点をあてた評価研究では、発音が発話要素の中でもマイナス評価されやすいことが示され、発音指導の重要性が指摘されている（石崎1999、渡部2004）。具体的には、音素の同定に関わる単音の誤り（東間・大坪1990）や高さの誤り（佐藤1995、石崎1999）

が一般日本人の評価を下げるのが指摘されている。一方で、評価者に焦点をあてた研究では、学習者の発話文の発音を評価対象とした場合、教師の評価が一般日本人より厳しいことが示されている(河野・松崎1998)。これらの研究では、一般日本人の評価をふまえた指導の重要性が述べられてきた。しかしながら、得られた成果は十分に生かされておらず、谷口(1991)が音声教育の現状と問題点について指摘した「現場での指導は教師個人の技量や裁量に任されている(谷口1991:22)」という状況は、小河原(2009)が指摘するように現在も変わっていないように思われる。

こうした問題の要因の一つとして、一般日本人の評価特性は徐々に解明されてきたものの、一般日本人の評価を取り入れる側の教師の評価実態については十分に明らかにされていない点があげられる。教師は一般日本人が持ち合わせない評価特性を有していると考えられることから、教師の評価特性を詳細に分析し、教師の評価行動を明らかにすることが求められる。

そこで、本研究では音声教育の要望が強い(仲矢・稲垣2005、渡辺2011)と指摘されているものの、研究が極めて少ないロシア語母語話者の音声を対象に教師の評価行動について検討する。

2. 問題と目的

これまで、ロシア語母語話者の発音を対象とした研究では、渡辺(2015)がロシア語母語話者の日本語発音特徴について、日本人教師(以下JT)とロシア語母語話者教師(以下RT)の認識の相違を検討している。その結果、RTがJTより認識している特徴として「撥音が[n]になる」や「疑問文をすべて極端な上昇調で発音する」等のロシア語の発音特徴が含まれる項目を示している。一方で、JTがRTより認識している特徴として「『す』が『ず』になる」項目を示している。

また、渡辺・松崎(2014)は、ロシア語母語話者の発音した語を対象として、JTとRTの評価の相違を検討している。その結果、JTがRTより[n]と「拍の減少」が同時に現れる(「ほんをよむ」が「ほ[no]よむ」になる)ような特殊拍に関する発音特徴を厳しく評価することや、RTがJTより「『ラ行はじき音』が[r]になる」などのロシア語の単音やストレスアクセントを含む発音を厳しく評価することを示している。また、評価の際、RTは特に言語的特徴に注目する一方で、JTは言語的特徴だけでなく意味がわかるかどうかにも注目することを指摘している。

しかし、得られた知見を教育に還元するには発話文を対象とした評価の検討も必要である。これまでも発話文を対象とした評価研究（清水2006）において、JT と非母語話者教師の発音に対する評価差は検討されてきた。しかし、文全体の評価分析に留まっている点、発話文に含まれる発音特徴が吟味されていない点において十分な検討がされていなかった。

そこで、本研究では、語を対象とした評価によって発音特徴別の評価差が明らかにされている JT と RT を評価者とし、JT と RT のロシア語母語話者の発話文に対する発音評価の視点の相違を検討する。さらに、語を対象とした評価との相違を検討する。

3. 方法

3-1 評価者

本研究の評価者は JT 12名、RT 12名である。JT は男性 5 名、女性 7 名、平均年齢36.0歳（SD 7.84）、ロシア語圏での教授経験は平均4.51年（SD 3.68）、日本語教授経験は平均7.46年（SD 4.78）である。RT は男性 1 名、女性11名、平均年齢33.7歳（SD 8.34）、日本語教授経験は平均14.46年（SD 12.13）である。

3-2 評価音声

音声はロシア人学習者（初級11名）が読み上げた発話文（「もしもし、山下先生のお宅でしょうか」「あの、夜遅くにご自宅にお電話してもうしわけございません」など27文・参考資料）を用いた。各文につき1名が読み上げた文章を評価対象とした。発話文は、ロシア語圏の大学生（1年生～5年生）または民間の日本語教室の学生、合計53名が読み上げた文の中から選別した。選別の際には、発話文の中に渡辺・松崎（2014）で評価対象としていた [r] [n]「曖昧母音化」「長音化」「拍の減少」などロシア人学習者によく見られる発音特徴が含まれているものを選んだ。文章を読み上げた学生の日本語レベルは初級から上級までであったが、選別した発話文を読み上げた学生のレベルは初級⁽¹⁾であった。

3-3 手続き

調査はロシア語圏の大学または教育機関の教室で行った。調査では、発話文を1文ずつ1回だけ聞かせた。評価者には不自然な箇所をシートにチェックするよう求めた。シートには発話文が書かれているが、音声を聞く際には

シートを見ないように指示した。各文のチェック後には指摘箇所について何を不自然だと判断したかコメントを求めた。分析では JT と RT が指摘した指摘総数と指摘傾向を比較した。指摘傾向については指摘数の多かった指摘箇所の相違と、指摘数の多かった発音特徴の相違を分析する。

なお、分析対象に関して、一般日本人が特に不自然だと評価する発話文は、教師による指導の必要性が高いと考えられることから、本研究では一般日本人が特に不自然だと評価した発話文を分析対象とした。

3-4 一般日本人による評価

一般日本人による評価は次のように行った。一般日本人（東京方言話者・社会人⁽²⁾）50名にロシア人学習者が読み上げた発話文を聞かせ7段階評定（1不自然-7自然）を求めた。なお発話文は、教師による評価で用いる27文を、意味のまとまりがよい箇所区切り1～3文からなる13発話とし、13の発話に対して評価を求めた。評価は、1発話ずつランダム提示をしたうえで求めた。以上はWeb調査として実施した。各発話文に対する評価平均値を算出し表1に示す。このうち特に厳しく評価された発話文 No 1～3を発話文 1～3とし、本研究の分析対象とした。なお、一般日本人に特に厳しく評価された発話文 1～3を以下に示す。

発話文1： お帰りになったら、今日中に連絡していただけますか。もうしわけないんですが、病院にいらっしやる時間をなるべくはやく…。

発話文2： セルゲイさんは京都大学の学生です。ロシア人ですが英語も話せます。セルゲイさんの専門は国際経済です。

発話文3： 旅行に行けそうだったら、わたしに連絡してください。今晚は8時まで電話に出られません、8時以降ならだいじょうぶです。よろしくおねがいします。

表1 発話文に対する一般日本人の評価

発話文No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	全体
評価平均値	2.28	2.48	2.74	2.86	3.02	3.20	3.52	3.72	3.84	3.96	3.96	4.26	4.36	3.40
(SD)	(1.20)	(1.37)	(1.35)	(1.39)	(1.17)	(1.37)	(1.57)	(1.74)	(1.57)	(1.56)	(1.65)	(1.69)	(1.69)	

4. 結果と考察

4-1 指摘総数と指摘数の多かった指摘箇所の変遷

JTとRTの各発話文に対する平均指摘箇所数を算出したところ（表2）、どの発話文についても大きな相違は見られなかった。

表2 発話文に対するJTとRTの平均指摘箇所数（SD）

発話文	JT	RT
1	4.17 (1.46)	5.25 (2.17)
2	5.25 (2.17)	4.75 (3.00)
3	4.42 (2.29)	5.42 (2.60)

次に、JTとRTの指摘傾向を分析するため、発話文別に指摘が多かった箇所について、その発音特徴、指摘人数を示した（表3）。指摘箇所の発音特徴は次のように分類した。聞き取りにくい、または、聞き取れないという理由で指摘されたものを「聞き取りにくい」、音が短いと指摘されたものを「拍の減少」、イントネーションがおかしい、間違っている、お願いのイントネーションになっていない等イントネーションに関する指摘を「イントネーション」、アクセントがおかしい、間違っている、ストレスアクセントになっている等アクセントに関する指摘を「アクセント」、「す」が「ず」になっていると指摘されたものを「す→ず」、ロシア語の単音であることを指摘されたものを「ロシア語の単音」、母音が曖昧であることや、母音が変わっていると指摘されたもの、母音が異なる単音に聞こえると指摘されたものを「曖昧母音化」と分類した。

分析の結果、全教師の半数以上（12名以上）の教師が指摘したのは発話文1「れんらく」と発話文3「いけそう」の2箇所しかなく、全体的に指摘箇所は個人差が大きいことが示された。

また、JTとRTの指摘人数を比較すると、発音特徴によってJTによる指摘が多い特徴と、RTによる指摘が多い特徴があることがわかる。以下、JTによる指摘が多い指摘箇所とRTによる指摘が多い指摘箇所について詳細を述べる。

表3 指摘が多かった箇所の発音特徴とJT・RTの指摘人数

発話文	指摘箇所	発音特徴	指摘人数		
			合計	JT	RT
1	1 れんらく	聞き取りにくい	15	9	6
	2 きょうじゅ <u>う</u>	拍の減少	9	6	3
	3 いただけませんか	イントネーション	7	2	5
	4 も <u>う</u> しわけ	拍の減少	6	3	3
	5 きょうじゅ <u>う</u>	アクセント	4	3	1
	5 もうしわけないんですが	アクセント	4	3	1
2	1 <u>で</u> すが	す→ず	10	7	3
	2 ロシアじん	アクセント	9	7	2
	3 き <u>ょ</u> うと	拍の減少	7	6	1
	4 セルゲイさん (2)	聞き取りにくい	6	3	3
	5 き <u>ょ</u> うとだいがく	アクセント	5	3	2
	5 せんも <u>ん</u>	ロシア語の単音	5	2	3
3	1 い <u>け</u> そう	曖昧母音化	12	8	4
	2 は <u>ち</u> じ (1)	ロシア語の単音	9	3	6
	3 で <u>ら</u> れませんか	ロシア語の単音	7	2	5
	4 は <u>ち</u> じ (2)	ロシア語の単音	6	1	5
	5 れんらく	ロシア語の単音	5	2	3
	5 こんばんは	アクセント	5	5	0

注1：() は発話文中に同一語句がある場合の出現順を示した。(1) は該当語句が、発話文の中で1番目に出現した語句であることを示す。

注2：JTとRTで指摘数の多いほうを太字で示した。

4-1-1 JTによる指摘が多かった指摘箇所

JTの指摘が多く、RTの指摘が少なかったものとして、「聞き取りにくい(2箇所中1箇所)」「拍の減少(3箇所中2箇所)」「す→ず(1箇所)」「アクセント(5箇所)」「曖昧母音化(1箇所)」があげられる。

「聞き取りにくい」で指摘されたのは、「れんらく [renraku] (発話文1)」を [naraku] のように発音したものだ。この発音についてはJT、RTのいずれも聞き取りにくさだけでなく意味のわかりにくさや意味がわからない点を指摘している教師がいた。このことから、意味に影響する特徴の場合、JT

のほうが指摘が多くなる傾向が見られると言える。

「拍の減少」で指摘されたのは、「きょうじゅう（発話文1）」を「きょうじゅ」と発音したものと「きょうと（発話文2）」を「きよと」と発音したものだ。特に、「きょうじゅう」については、JTの1名が意味がピンとこなかった（「聞き取りにくい」）、RTの1名がわかりにくかった（「聞き取りにくい」）とコメントしており、意味に影響すると捉えた教師がいた。このことから、「きょうじゅう」は拍の減少だけでなく、意味が分かりにくくなっていたことがJTの指摘につながったと考えられる。一方で、RTは学習経験や教授経験から学習者の発話意図が理解できるために指摘しなかった可能性が考えられる。また、日本語のリズムは母語を問わず学習者にとって困難なことが示されており（助川1993）、教師であるRTにとっても指摘が難しかった可能性が考えられる。以上のような理由から、JTのほうがRTより指摘が多くなったと言える。なお、長音の誤りについては、中国人学習者と韓国人学習者の発話文を評価対象とした研究（渡部2003）で、JTは「長音が日本語の発音と異なっていること」に注目しているが、非母語話者教師は注目していないことが示されている。本研究はこの結果を支持するものである。

「す→ず」で指摘されたのは、「ロシア人ですが（発話文2）」を「ロシア人ですが」と発音したものだ。この発音は音素が異なっていることがJTによる指摘につながったと考えられる。加えて、JTが「す→ず」をロシア語母語話者の典型的な特徴であると捉えていることも指摘につながったと言える⁽³⁾。なお、この発音にはロシア語の「有声子音の前の無声子音は有声になる」という現象が現れている。この点に関して、「ロシア人にとっては無意識のうちに有声化が起きている（渡辺2015）」可能性があり、結果としてRTは「す→ず」を指摘しなかったと考えられる。

「アクセント」が正しくないと指摘されたのは、「今日中（発話文1）」「もうしわけないんですが（発話文1）」「ロシア人（発話文2）」「京都大学（発話文2）」「今晚は（発話文3）」だった。なかでも、「ロシア人」と「今晚は」はJTとRTで5人の差が見られた。「ロシアじん（LHHLL）」⁽⁴⁾は「ロシアじん（HLLLH）」のように発音されていた。「こんばんは（HLLLL）」は「こんばんは（HLHLL）」のように発音されていた。JTの中にはアクセントが間違っているという点だけでなく高低の誤りを指摘した教師もおり、JTはアクセントの高低の誤りに注目し、指摘したと考えられる。高低の誤りについては、韓国人学習者や中国人学習者の発話文を対象とした研究（佐藤1995）や、オー

ストラリア人学習者の発話文を対象とした研究（石崎1999）で、一般日本人を評価者とした場合に特に高さが評価に影響することが指摘されている。本研究の評価者は一般人でなく教師だが、日本人が高低の誤りに注目するという点では、佐藤（1995）、石崎（1999）を支持する結果となった。一方で、RTは高低の誤りをあまり指摘しないことが示された。なお、「アクセント」についてはJTの指摘自体が3名と少ない場合がある。この点に関して、アクセントの誤りについては「ねない（LHL）」（正：LHH）のように、評価を下げない型があることが示されており（松崎・河野2005）、高低の変化の種類も指摘の有無に影響した可能性が考えられる。

「曖昧母音化」で指摘されたのは、「いけそう（発話文3）」の「け [ke]」の母音で、[e]が[u]に近い音のように発音されていた。この発音を指摘したJTは8名中7名が母音が曖昧化している点ではなく、「『く』のように聞こえる」点を指摘していた。このことから、JTにとっては音素の違いが指摘につながったと解釈できる。一方、「いけそう」を指摘したRTは「母音が違う」とコメントしており、「曖昧母音化」が生じるというロシア語の特徴に気付いたことが指摘につながったと言える。しかしながら、RTは具体的に母音について指摘した4名以外は3名が「何か変」と指摘したのみであった。この点に関して、「曖昧母音化」は通常、ロシア語のストレスアクセントに伴って生じるものであるが、「いけそう」はストレスアクセントが目立たない発音であった。そのため、RTが「曖昧母音化」に気付きにくく、結果として指摘はしたものの「何か変」というコメントにとどまったり、指摘につながらなかったりした可能性が考えられる。

以上のように、発話文を評価対象とした場合、意味に影響する特徴や、音素が変化した特徴、高低が変化した特徴は、JTのほうがRTより注目することが示唆された。ただし、「聞き取りにくい」「拍の減少」「アクセント」では、語によってJTの指摘自体も少なくJTとRTの指摘に差が見られない場合もあった。このことから、指摘差が生じるかどうかについては、発音の逸脱の程度の影響もあることがうかがえる。

4-1-2 RTによる指摘の多かった指摘箇所

RTの指摘が多かったものとして、「ロシア語の単音（5箇所）」「イントネーション（1箇所）」があげられる。

「ロシア語の単音」で指摘されたのは、「せんもん（発話文2）」の「ん」

[N] が [n] に、「はちじ (発話文3の2箇所)」の「じ」[ʒi] が [ʒi] に、「でられません (発話文3)」の「ら」[re] が [ra] に、「れんらく (発話文3)」の「れ」[re] が [re] に発音されたものだった。なかでも「はちじ」と「でられません」は JT と比較し 3～4 名の差が見られた。この 2 語に見られた [ʒ] [r] はどちらもロシア語の子音であり、この子音の特徴が見られたことが RT の指摘につながったと言える。一方、JT はロシア語の子音である [ʒ] [r] に気付きにくかった可能性がある。ただし、[r] について、JT と RT の認識の相違を検討した研究 (渡辺2015) で、JT は RT 同様に [r] を「よく見られる」と指摘しており、RT の指摘との間に差が見られなかった。また、渡辺・松崎 (2014) の JT のコメントに異音はあえて寛容に評価しているというものがある。従って、ロシア語の単音は特徴によっては認識していても、異音レベルの誤りであるという判断から JT があえて見逃している場合があると解釈できる。あるいは、認識している特徴であっても、文評価になると気付きにくくなる可能性が考えられる。

「イントネーション」で指摘されたのは、依頼文である「連絡していただけませんか (発話文1)」の「か」が極端に上昇していたものだった。これに関しては、1 名の RT が「ロシア語のイントネーション」と指摘していることから、「か」にロシア語にみられる上昇イントネーションが現れていたと考えられる。従って、イントネーションについても単音同様、ロシア語の特徴が現れていたことが RT による指摘につながったと考えられる。一方 JT は、ロシア語の単音同様に、ロシア語の発音特徴に気付きにくかったことが、指摘の少なさにつながった可能性がある。なお、日本語母語話者の「～いただけませんか」の「か」のイントネーションについては、男性は非上昇イントネーションが多く、女性は上昇イントネーションが多い (小池2002) というように幅があることが指摘されている。JT が学習者の「か」のイントネーションを指摘しなかったのは、こうした背景が要因であった可能性も考えられる。

イントネーションの発音特徴については、本研究で指摘されたのが「～いただけませんか」という依頼表現に限られるため、今後は他の発話意図を表すイントネーションについても検討が必要である。

以上のように、ロシア語の単音やイントネーションにみられるロシア語の特徴について、RT は注目するものの JT はあまり注目しないことが示唆された。

4-2 JTとRTによる指摘の多かった発音特徴

JT と RTがそれぞれの発音特徴に注目しやすいかをさらに検討するため、各発話文について、指摘箇所数の多かった発音特徴上位5つを表4に示した。加えて、表4には各発音特徴を指摘した人数の異なり数を示した。発音特徴は表3で分類した「聞き取りにくい」「拍の減少」「イントネーション」「アクセント」「す→ず」「ロシア語の単音」「曖昧母音化」に以下のものを加えた。音が長くなっているという理由で指摘されたものを「長音化」、必要ない場所にポーズが挿入されている、ポーズが多い等ポーズに関する指摘を「ポーズ」に分類し加えた。

JTの指摘を見ると、「拍の減少」と「アクセント」の指摘箇所が多いことがわかる。従って、JTは学習者の発話文を聞いた際に様々な発音特徴の中でも特に「アクセント」と「拍の減少」に注目する傾向にあると言える。なお、発話文3では「ロシア語の単音」が特に多い。この点に関して、RTの発話文3の「ロシア語の単音」の指摘箇所数が発話文1や発話文2に比べ極端に多いことから、発話文3の発話者の特徴がロシア語の単音が特に多いものであったこと⁽⁵⁾が結果に影響したと考えられる。

RTの指摘を見ると、どの発話文においても「ロシア語の単音」が多く、次いで、発話文1では「ポーズ」、発話文2では「アクセント」が多い。発話文3は「ロシア語の単音」以外は3箇所未満とどれも少ない。従って、RTは学習者の発話文を聞いた際に様々な発音特徴の中でも特に「ロシア語の単音」「アクセント」「ポーズ」に注目する傾向にあると言える。

なお、発話文2の「アクセント」は6箇所中2箇所ですトレスアクセントがある」と指摘されていることから、RTの場合、高低の誤りに注目するというJTの視点とは異なり、ロシア語の特徴であるストレスアクセントが置かれた場合に「アクセント」に注目する可能性が考えられる。

また、発話文1の「ポーズ」は「RTによる指摘が多かった箇所(表3)」では上位にあがらなかったが、「指摘が多かった発音特徴(表4)」の分析では上位にあがっている。これは一箇所あたりの指摘人数が少なかったためで、指摘された箇所はすべて1箇所につき2名または1名の指摘にとどまっていた。このことから、ポーズはRTが注目しやすいものの、指摘箇所に個人差が現れやすい特徴であると言える。一方、JTによる「ポーズ」の指摘は、発話文1と発話文2に1箇所各1名見られたのみであった。しかし、発話文7に対してはJT12名中8名が指摘をしていた。発話文7はJTが注目する傾向

にある「拍の減少」の指摘がなく、「アクセント」も1名が1箇所を指摘したのみであった。このことから、JTはポーズの指摘をしないというわけではなく、注目する傾向にある特徴、つまり「拍の減少」や「アクセント」の特徴が見られなければポーズにも注目することが示唆された。

表4 指摘が多かった発音特徴とJT・RTの指摘人数(異なり数)

発話文	JT		RT		
	指摘箇所	人数	指摘箇所	人数	
1	拍の減少	5	ロシア語の単音	9	5
	アクセント	4	ポーズ	8	7
	イントネーション	3	拍の減少	5	6
	聞き取りにくい	2	聞き取りにくい	3	6
	曖昧母音化	2	イントネーション	3	6
2	アクセント	8	ロシア語の単音	11	7
	拍の減少	5	アクセント	6	5
	ロシア語の単音	4	聞き取りにくい	4	4
	聞き取りにくい	4	長音化	3	3
	す→ず	1	ポーズ	2	3
3	ロシア語の単音	12	ロシア語の単音	18	11
	アクセント	6	イントネーション	3	3
	聞き取りにくい	3	曖昧母音化	2	5
	長音化	3	拍の減少	2	2
	曖昧母音化	1	アクセント	2	2
			ポーズ	2	2

ただし、RTの「アクセント」と「ポーズ」に対する評価については、本研究で分析対象とした発話文に限られているため、発話文を増やしたうえで引き続き検討する必要がある。なお、ポーズについては、日本語母語話者の講演音声の評価対象とした研究(籠宮・山住・榎・前川2007)で、発話や発話者の印象に大きな影響を与えることが示されている。また、学習者の自由発話を評価対象とした研究(佐藤2004)ではポーズが長さの誤りより評価に影響を与えることが示されている。このことから、ポーズは日本語学習者の日

本語音声の中でも指導の優先度が高い可能性が考えられる。従って、発話文の特徴と教師の指摘傾向の関係について十分な検討が求められる。

4-3 語評価と文評価の比較

以上の結果を、語に対する評価を検討した研究（渡辺・松崎2014）の結果と比較する。渡辺・松崎（2014）ではロシア語母語話者の発音した「ロシア語の単音」や「拍の減少」が含まれた語を対象に、JTとRTに4段階評価で「自然さ」の評価を求め、その評定値の差を検討し、評価後のインタビューをもとにJTとRTの評価基準を分析している。以下、渡辺・松崎（2014）を語評価、本研究を文評価とし、語評価と文評価の比較（表5）をもとに、JTとRTの評価行動について検討する。なお、分析は語評価と文評価の両方で扱った「意味が分かるかどうかに注目する」「ロシア語の単音」「す→ず」「拍の減少」「曖昧母音化」を対象に行う。

第一に、意味が分かるかどうかについてJTのほうがRTより注目するという点、ロシア語の単音に対してRTのほうがJTより厳しく評価するという点は、文評価においても語評価を支持する結果となった。

第二に、「す→ず」と「拍の減少」について、語評価ではJTとRTの評定値に差が見られなかった。一方で、文評価ではJTのほうがRTより指摘していた。

表5 語評価と文評価の比較

	語評価 (渡辺・松崎2014)	文評価
意味が分かるかどうかに注目	注目 JT>RT	注目 JT>RT
ロシア語の単音	厳しい RT>JT	指摘 RT>JT
す→ず	差なし	指摘 JT>RT
拍の減少	差なし	指摘 JT>RT
曖昧母音化	厳しい RT>JT	指摘 JT>RT

注：「注目 JT> RT」はJTのほうがRTより注目することを、「厳しい RT>JT」はRTのほうがJTより厳しいことを、「指摘 RT> JT」はRTのほうがJTより指摘することを示す。

「す→ず」については、JTとRTの認識の相違を検討した研究（渡辺2015）でJTは11名中9名が見られると認識していた。従って、JTは「す→ず」を認

識している場合が多く、語評価だけでなく文評価においても「す→ず」に注目すると言える。ただし、RTと比べれば指摘数が多かったものの、指摘していないJTもいることから、個人差もあることがうかがえる。一方で、RTは渡辺(2015)において11名中6名しか「す→ず」を認識していなかった。このことから、RTは「す→ず」を認識していない場合が少なくなく、語評価であれば「何か変」と評価できるが、文評価では気付けなかった可能性が考えられる。よって、教師が認識していない特徴について、評価対象が限られている語評価では指摘できるが文評価では指摘できない可能性が示唆される。こうした評価行動が「す→ず」に限られるものであるかは、今後の検討が必要である。

「拍の減少」は、JTとRTの認識の相違を検討した研究(渡辺2015)でJT、RTがともに指摘していた⁽⁶⁾。よって、JTは「拍の減少」を認識しており、語評価や文評価においても「拍の減少」を厳しく評価すると言える。一方で、RTは「拍の減少」を認識していて、語評価では厳しく評価しているにもかかわらず、文評価では指摘しなかった。RTが文評価において「拍の減少」を指摘しない理由としては、上述したように、リズムの知覚の難しさが影響した可能性や学習経験や教授経験から学習者の発話意図が理解できる可能性が考えられた。なお、発話意図の理解に関して、文評価は語評価に比べ、「拍が減少していて発話意図が分かりにくくなっている語」の意味を文脈から推測でき、理解しやすいと言える。よって、学習経験や教授経験だけでなく、文脈も意味理解にプラスに働いたことが「拍の減少」の指摘の少なさにつながった可能性がある。

ただし、文評価に現れる「拍の減少」については、指摘箇所によってRTも指摘している場合があることから、「拍の減少」の出現位置や、他の発音特徴の出現等、文評価特有の要素が指摘の有無に影響した可能性も考えられる。

第三に、「曖昧母音化」について、語評価ではRTのほうがJTより厳しく評価していた。一方で、文評価ではJTのほうがRTより指摘していた。また、JTとRTの認識の相違を検討した研究(渡辺2015)でJTは11名中6名しか「曖昧母音化」を認識していなかった。よって、JTは「曖昧母音化」をロシア語母語話者に見られると認識していない場合が少なくなく、語評価でも比較的寛容に評価していたと言える。しかし、文評価では指摘していた。この理由として、本研究の指摘箇所は曖昧母音化の特徴が音素の変化に結び付いていたことから、JTにとっては、曖昧母音化に気付くかどうかという点より音素

の変化に気付くかどうかという点が指摘につながったと考えられる。一方で、RTは渡辺（2015）で11名中11名全員が「曖昧母音化」を認識していた。よって、本研究において、RTは「曖昧母音化」を認識していて、語評価では厳しく評価するものの、文評価では指摘しない場合があることが示された。この理由としては、上述したように、今回分析対象とした発話文3に見られた曖昧母音化はストレスアクセントが目立たないものであったことが考えられる。さらに、「拍の減少」同様に、文脈や「曖昧母音化」の出現位置、他の発音特徴の出現等の文評価特有の要素が影響した可能性が考えられる。

以上のように、「す→ず」「拍の減少」「曖昧母音化」に対する評価は、いずれも文評価特有の要素が評価に影響し、語評価とは異なる結果になったと考えられた。具体的に、どういった要素が評価に影響するかについては、今後の検討が望まれる。

5. まとめ

本研究では、ロシア人学習者の発話文に対するJTとRTの評価の相違を検討した。その結果、発話文を評価する際、JTは「拍の減少」と「アクセント」に注目しやすいことが示唆された。また、JTはRTより意味に影響する誤りや、音素の変化、高低の誤りに注目することが示された。一方で、RTは「ロシア語の単音」や「ストレスアクセント」、「ポーズ」に注目する可能性が示唆された。また、RTはJTより「ロシア語の単音」だけでなく、ロシア語の特徴が表れている「イントネーション」に注目することが示された。ただし、全体的に指摘箇所にはばらつきがあり、発音特徴の指摘には個人差が大きいことがうかがえた。

これまでもJTと非母語話者教師の評価の相違については検討されてきた。しかし、本研究の結果によって、語評価と文評価では評価対象となる発音特徴によって教師の評価行動が異なる場合があることが示された。具体的にはRTは文評価においては語評価とは異なり「す→ず」「拍の減少」「曖昧母音化」に注目しないあるいは気付きにくいことが示された。特に、「す→ず」に対するRTの評価からは、教師自身が認識していない発音特徴の場合、語評価では指摘できるものの、文評価では見逃す可能性があることが示唆された。また、本研究では、語評価では分析対象にできなかった「～ていただけませんか」のイントネーションの誤りや「ポーズ」について、RTはJTより注目することが示された。以上のことから、教師の評価行動を把握するためには語に対

する評価だけでなく、本研究で対象としたような発話文を対象とした評価の分析も必要であることが示された。

なお、JT と RT が本研究によって示された評価特性を認識することは、JT と RT が自らの評価特性を顧みることにつながり、それが自身の評価スタイルの改善につながっていくと考える。ただし、本研究では、教師の評価行動の実態を明らかにすることができたものの、優れた評価行動とはどのようなものかという点については十分に検討できていない。そのため、今後はどのような評価行動が優れた評価行動になりうるのかについて検討していく必要がある。

注

- (1) 『みんなの日本語』で日本語を学習している学生であった。学生は、日本語主専攻の学生、副専攻の学生、民間日本語学校の学生と様々だったため日本語学習期間は、1年～3年である。
- (2) 50名は言語学、言語教育、音声学を学んだ経験がない者であった。
- (3) 渡辺 (2011) や語評価 (渡辺・松崎2014) において、JTは「す→ず」をロシア語母語話者の典型的な特徴であることを指摘していることが示されている。
- (4) Lはアクセントが低いことを、Hは高いことを表す。
- (5) 発話文3で指摘されたロシア語の単音を次に示す。RTのみが指摘したロシア語の単音を　で、JTのみが指摘したロシア語の単音を　で、JT、RTが共に指摘したロシア語の単音を　で示す。いずれも、下線部の子音がロシア語の単音として指摘された。「りょこうにいけそうだったら、わたしにれんらくしてください。こんばんは、はちじまででんわにでられませんが、はちじいこうならだいじょうぶです。よろしくおねがいします。」
- (6) ロシア語母語話者に見られる特徴について、JTは「長音の長さが不十分」を11名中10名が、「促音の長さが不十分」を11名全員が、「撥音の長さが不十分」を11名中9名が見られると回答している。RTは「長音の長さが不十分」「促音の長さが不十分」「撥音の長さが不十分」のいずれも11名全員が見られると回答している。

参考文献

石崎晶子 (1999) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価—主観的評価と客観

- 的評価の関係一』『第二言語としての日本語の習得研究』3号、第二言語習得研究会、19-35.
- 小河原義朗 (2009) 「一過去から現在へー日本語音声教育を振り返る」水谷修監修『日本語教育の過去・現在・未来 第4巻 音声』凡人社、24-45.
- 籠宮隆之・山住賢司・楨洋一・前川喜久雄 (2007) 「聴取実験に基づく講演音声の印象評定データの構築とその分析」『社会言語科学』第9巻第2号、65-76.
- 河野俊之・松崎寛 (1998) 「一般日本人と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』5-2、日本語教育方法研究会、24-25.
- 小池圭美 (2002) 「依頼文における終助詞「か」のイントネーション」『言語文化と日本語教育』24、13-27.
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』第5号、国際交流基金、139-154.
- 佐藤友則 (2004) 「ポーズと長さが音声評価に与える影響力の比較ー外国人学習者の日本語音声評価においてー」『信州大学留学生センター紀要』5号、59-68.
- 清水寿子 (2006) 「日本人教師と韓国人教師による発音評価」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、187-192.
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向ーアンケート調査の結果からー」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究 D1 班平成4年度研究成果報告書、187-222.
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点ーアンケート調査の結果についてー」水谷修・鮎澤孝子編『シンポジウム日本語音声教育ー韻律の研究と教育をめぐってー』凡人社、20-25.
- 東間由美・大坪一夫 (1990) 「外国人の日本語発話の日本人による評価」文部省重点領域研究『日本語音声』研究報告、4、70-75.
- 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127号、日本語教育学会、51-60.
- 松崎寛・河野俊之 (2005) 「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125号、日本語教育学会、57-66.
- 渡部倫子 (2003) 「日本語口頭運用能力の評価基準ー評価者による相違一」『日本教科教育学会誌』第25巻、第4号、日本教科教育学会、11-17.
- 渡部倫子 (2004) 「プラス評価・マイナス評価されやすい発話の要素とはー日本語学習者に対する日本語母語話者の評価ー」『教育学研究ジャーナル』創刊号、中

国四国教育学会、77-81.

渡辺裕美（2011）「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点—日本人日本語教師に対する調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』第7号、国際交流基金、71-84.

渡辺裕美・松崎寛（2014）「発音評価の相違—日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較—」『日本語教育』159号、日本語教育学会、61-75.

渡辺裕美（2015）「ロシア人日本語学習者の発音に対する日本人教師とロシア人教師の認識」『日本教科教育学会誌』第38巻1号、日本教科教育学会、59-68.

わたなべ ひろみ

（高知大学国際連携推進センター非常勤研究員）

参考資料

評価対象とした27文13発話を以下に示す。発話文Noは表1と同一である。

1. お帰りになったら、今日中に連絡していただけますか。もうしわけないんですが、病院にいらっしゃる時間をなるべくはやく、、、。
2. セルゲイさんは京都大学の学生です。ロシア人ですが英語も話せます。セルゲイさんの専門は国際経済です。
3. 旅行に行けそうだったら、わたしに連絡してください。今晚は8時まで電話にできませんが、8時以降ならだいじょうぶです。よろしくおねがいします。
4. もしもし、山下先生のおたくでしょうか。あの、夜おそくにご自宅にお電話してもうしわけございません。セルゲイさんの指導教官の先生ですね。
5. じつは、セルゲイさんが車で事故をおこして、病院にきています。意識はあるんですが、酔っていてなにも話すことができません。
6. あー、もしもし、アーニヤです。来週のモスクワ旅行のことですが、よかったらいっしょに行きませんか。あした、電車の切符を買います。切符の値段は50ドルくらいです。
7. お帰りになったら、今日中に連絡していただけますか。もうしわけないんですが、病院にいらっしゃる時間をなるべくはやく、、、。
8. 日本の食べ物で何が好きですか。
9. ちょっと喫茶店で待っていてください。すぐ連絡します。
10. わたしは将来、通訳か翻訳の仕事がしたいので、いろいろな本を読むようにしています。
11. もしもし、ベロニカです。あしたの会議は一時からになるそうです。
12. 誕生日はいつですか。
13. 土曜日は日本語の授業がありますが、あさってはありません。

※ 1 と 7 は同じ文だが、発話者が異なる。